

# 令和5年度 第1回札幌市文化芸術基本計画検討委員会 議事録

- 【開催日時】 令和5年7月25日（火）18:30～20:30  
【場所】 札幌市民交流プラザ 1階 SCARTS コート  
【出席者】 （以下、敬称略）

## 委員

合同会社ペン具（ペングアート） 代表	ト部 奈穂子
北海道大学 名誉教授	北村 清彦
札幌芸術の森美術館 館長	佐藤 幸宏
札幌芸術・文化フォーラム 副代表	白鳥 健志
北海道大学大学院 文学研究院 教授	谷本 晃久
北海道国際音楽交流会 理事長	長沼 修
市民公募委員	成田 真由美
（公財）札幌国際プラザ 調整担当部長	根子 俊彦
市民公募委員	丸山 悠輝

## 事務局

札幌市市民文化局文化部長	柏原 理
札幌市市民文化局文化部文化振興課長	高橋 亮
札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長	柴垣 孝治
札幌市市民文化局文化部文化振興課	工藤 智弘

## 【議事】

柴垣：（1 ページ目：基本計画の概要の説明）

成田：子ども意見を聴取するための動画の中にサッポロカイギュウが出てきていたが、どこまでが文化芸術の枠なのでしょう。

柴垣：今ご説明した1枚目をご覧いただきたいのですが、特にステージ3で文化の保存と活用というステージがあり、その中に①文化資産・自然遺産の保存と活用というのが入っています。サッポロカイギュウについては、この部分に位置付けているものです。

文化芸術は非常に幅が広くて、いわゆる芸術というものもあれば、文化財もあれば、自然遺産というものもあります。第2回で文化芸術の価値を議論する際は一定程度範囲として、国が示しているものがありますので、第2回ではお示ししたいと考えています。

ト部：子どもたちは心豊かな芸術を表現してくれるのですが、言葉を選ばずに言いますと、大人が喜びそうな言葉を言える子というのは面白くなくて、少し変な子の方が面白いというところがあります。こういった募集に乗ってくる子だけでなく、こちらから聞きに行く、大人の方から聞きに行くというのがあると、子どものことが良くわかるのではないかと思います。

北村：方法をもう少し工夫した方がよいということですね。事務局の方でもし機会があれば対応していただければと思います。白鳥さんは自己紹介でまちづくりについてお話をされていましたが、計画とまちづくりのつながりはどのようなものでしょうかね。

白鳥：直接まちづくりに関係するものは今ないので、これからどのように入れていくかということかと思っています。子どもたちの意見聴取については、聞く内容がちょっと難し部分もあるかとは思いましたが、実施済みのことでもありますので、こちら側でその辺は考慮して把握することに努めればよいことかなと思っています。また、1ページ目は計画の説明と今までこうしてきましたというような話なので、問題は2ページ目以降だと思います。

北村：これから4期目で何ができるかが大事ということですね。それでは次の議事3に進みます。

計画見直しの視点。

柴垣：（2ページ：「計画の見直しの視点」以降を説明）

北村：まず第3期計画の振り返りをしながら、計画をどのように見直すのかという視点、4つのステージの振り返りがありました。と同時に、札幌市が毎年行っている意識調査の結果、また、国の基本計画の改定の紹介もあって踏まえてどうするかということを考えていく必要があるとのことでした。観点が非常に多いので、まずは見直しの視点について何かあるでしょうか。その後、事務局案の方向性についてもご意見を伺いたいと思います。

白鳥：コロナがあったので、データを見ても、コロナ禍で指標が伸びていないものは理解できますが、我々が考えてみたいのは、コロナ禍であっても伸びているものはどうしたことだったのかという点。市民が求めているのか、社会全体が求めているのかも含めて、それを整理する必要があると思いました。最終的にコロナ禍にあったので次の見直しは、『現行計画を土台として』ということだが、コロナ禍であったからの変化か、それとは違う要素が含まれているかを見据えて考えた方がよいと思います。

北村：例えばコロナ禍でイベントなどができなかったというのはあると思いますが、一方で伸びているというのは何だと思いますか。

白鳥：例えば、ステージ3でクリエイティブ産業の従事者数が伸びています。この従業者数を指標にするのが良いのかは別だが、クリエイティブ産業が伸びていると感じます。それが、コロナ禍だったから伸びたのか、そうでなくとも伸びたのか。コロナ過との因果関係を整理する必要があるのではないのでしょうか。

北村：方向性のところにも関わるお話かとおもいますが、コロナ禍の影響を受け観客数が減っているという部分はあるけれど、コロナ禍なのに伸びているのはどの部分なのか、すべてをコロナのせいにしてしまうと議論が広がらないということはありませんね。色々なファクターはあるような気はしますが。

成田：クリエイティブ産業とは何を指しているのでしょうか？

柴垣：例えば、テレビ局勤め、文化芸術に従事するアーティストなどが含まれています。

成田：オンライン配信も入っているのなら伸びるのは当然だと思います。コロナの時期はオンラインにいろいろなものが傾いていった時期ですので。

長沼：YouTube など？

成田：だけでなく、その他のライブ配信なども入っていると、それだけで大きく数字が伸びていると思います。そうだとすると議論すべきものかどうか疑問を感じます。

白鳥：それが社会が必要としているものなら、計画にちゃんと謳うべきだと思います。コロナ禍だから伸びたのなら、特に言う必要がないかもしれませんが、これからの社会が求めているものを反映する必要があるので、そのあたりを正しくとらえなければいけないのではないかと思います。

成田：文化芸術の範囲内ということでしょうか、それともそれをとっぴらったの話なのでしょう。

白鳥：文化芸術としてコロナ禍にかかわらず社会がもとめているなら、それはやるべきものなのではないかという話。

北村：クリエイティブ産業の従事者数の根拠は国の統計でしょうか？

柴垣：経済センサスの産業分類から拾っています。

北村：国にはクリエイティブという小項目はないと思いますが。

柴垣：そのとおりです。より細かい項目が並んでいる中で、市がいくつかをまとめて、クリエイティブ産業と定義して拾っている状況です。

北村：創造都市さっぽろを議論するときに、何をもってクリエイティブと呼ぶのかという議論があり、YouTube・配信などもあって、そういった職能をピックアップして数字を挙げたのだと思います。そういった数字がコロナの影響があって伸びたのか、そうではないのか。多分、私は関係ないと思う。この数字をどう評価すべきかはわかりませんが、直接コロナとは結び付かないと思っています。

白鳥：とすれば、第4期計画の方向性の案の中で、現行計画の基本的な考え方を土台とし、見直しを進めるというところに、検証が難しいからと書いてある。つまり現行

計画を基本としてさらに何が必要かを考えていくということなるのだと思いますが、それが、コロナとは関係なく伸びているのだとすれば、計画の見直しの方向性を示すところに、“コロナ過とは関係なく社会が必要とされるクリエイティブ産業にあっては・・・”と謳うことも必要ではと思います。

北村：第4期の方向性についてはまたあらためて御意見を伺いたいですが、コロナがあったから第3期を基本とするという因果関係は疑問が浮かぶかもしれないですね。佐藤さんは芸文財団なので様々な事業をしていると思うが、未来への布石として、何かしていることがあれば。

佐藤：今の職場だけでなくそれ以前も美術館に勤めてきました。施策なので数年ごとに計画を立てるのは理解できますし、税金を用いているので検証が必要ということも理解できます。ただ、私個人の思いとして、文化芸術としてとらえられているものはいろいろあって幅広いですし、誰でも配信できる時代でYoutuberも増えていますが、必ずしもクリエイティブなものばかりではないのかなど。確かに5年というスパンで見直していくことは必要だと思いますが、検証ということになると、こういうことがクリエイティブ・創造性に影響を与えるかどうかは5年ではわかりませんし、社会変化のスピードも速くなっているため、この数字がどの程度妥当性があるのかはわかりませんが。目先の数字だけで傾向判断をしてよいのかと思うところはあります。技術発展などによって、芸術・アートを体験する形態も変わっていくと思いますが、やはり、美術館であれば実際に作品に触れる体験は大事ですし、先ほどの歴史ツアーもそうですが、実際にものに触れて体験することは大切な根本的なものだと思います。なるべくそういうものに触れる機会を増やすことが本質的に重要なのではないかと思います。

北村：様々なファクターで上下するだろうが、あまりそれに振り回されず機会提供するのが大事ということですね。

根子：素朴な疑問だが、札幌市創造活動支援事業が大きく取り上げられ、それなりに成果もあがっているようですが、コロナがあったから立ち上がったものなのでしょうか。

柴垣：そのとおりです。元々、文化行政を進めるにあたっては、条例にアーティスト等の意見を聞くようにと書いていますが、札幌文化芸術未来会議<sup>1</sup>はコロナが1つのキーになって始まった会議です。短期的にどういう施策が必要というところから始まりましたが、併せて長期的な支援の在り方についても議論を行った会議となってい

---

<sup>1</sup> ※ 文化芸術関係者が新型コロナウイルス感染症の影響を受けていることも踏まえ、市の文化芸術に関する短期的及び中長期的な施策の推進に関して市民、芸術家、文化芸術活動団体などと意見交換を行うことを目的に設置された会議。

参考 URL : <https://www.city.sapporo.jp/shimin/bunka/entaku/index.html>

ます。そのなかで札幌市創造活動支援事業が生まれ、モデル事業としてではありませんが、令和4年度に実施したところです。

根子：逆に言うとコロナをきっかけに新しい事業が生まれたというプラスの面。窮すれば通ず、新しいものが生まれるというよい見本なのではないでしょうか。

北村：当該事業は検証中という理解で良いのでしょうか？

柴垣：この委員会と並行して検証を行っているところです。

北村：未来会議は続くのでしょうか。

柴垣：全10回で終了しており、別途委員会を作って継続して事業の評価検証を担う形にしています。現行の委員自体は4名で進めていくこととしております。

北村：未来会議の前身で円卓会議があり、私も参加しましたが、この会議でも基本計画の方向性を話し合いました。円卓会議的なものは解消されたということでしょうか。

柴垣：円卓会議自体は終了していますが、文化芸術施策を進めるにあたっては様々な方の意見を聞くということは条例に書いているので、会議体の名前や性格は変わりますが、様々な方の意見を聞きながら進めていくことには変わりはありません。

北村：いろいろなチャネルを活用していくということですね。卜部さんは子どもの関係とかで何かご意見はありますか。

卜部：コロナ禍だからか否かという話は興味深いと感じています。私たちの方でも、他に活動ができないから黙々とモノを作る子たちがいましたが、活動ができるようになったからといってやめたわけではなく今もつながっています。

長沼：第3期計画の振り返りが大きなポイントだと思います。ここに書いてあるPMFやシティジャズ、国際芸術祭、こういった大規模なイベントについて、どういう状況なのか、このままでよいのかという議論は組織的にされたのでしょうか。今後考える中でこのままでよいのかということ、市民がどう受け止めているのか。予算の大きな部分を占めているので必要なことだと思います。

また、イベントに参加した観客数などが出ているが、文化芸術の鑑賞活動への参加割合は令和2・3年は70%程度。この数字はどういう数字なのでしょうか。

柴垣：参加割合の数字はアンケートで、何かしらの鑑賞活動をした人のパーセンテージなので、人により内容はことなるが、何かしらを見た人の割合となります。

長沼：振り返るなら、そういった大きなイベントを振り返らなければならないと素朴に思います。それから、中間支援団体を通じてアーティスト支援を行うというもの。初めて見たのだが、これはどういう事業なのでしょうか。

工藤：先ほどのご説明にも少しございましたが、従来の行政によるアーティスト支援であれば、補助金の交付などを直接行うというのが一般的でした。一方で、どうしてもその対象から漏れてしまう方がいらっした。また、本当に望む支援になっているかという観点で、資金だけでなく技術的支援や人材同士のマッチングなど、より

多様な支援のあり方もあり得る。しかし、それらを行政の独力で行うのは難しい部分があるため、アーティスト等の実情を理解されている方々にご協力をいただき、市としてはその方々に補助金を交付することで、よりアーティストの実情に即した支援を行うという趣旨の事業です。

長沼：具体的にはどのような支援があったのですか。

工藤：実際に令和4年度に取り組んでいただいた事業者は4団体ございます。内容を具体的に申し上げますと、例えば、アーティストが通常創作活動を行うのとは異なる環境、学校や商店街などに活動の場を広げる取組みがございます。また、いわゆるアーティスト・イン・レジデンスというものですが、通常の活動とは異なる土地にアーティストが赴き着想を得て活動していただく、それを支援するというものもございました。あるいは、幅広い領域で相談を受け付け対応をしていくことで、これまでの支援では対象にならなかった方まで拾い上げるという趣旨のものもございました。他にも様々ございますが、4団体がそれぞれ異なる支援を行っております。

長沼：それは広くPRされていたのですか。

工藤：公募に際してはWebを通じて広報をしており、先ほどのご説明にあった委員の皆様を選定をしていただきました。43団体の応募があり、そこから選ばれたのがこの4団体になります。

白鳥：よい事業だと思います。よい点は、未来会議をやる中で、逐次報告されていたこと。どう議論があって何が提案されたのかわかる。その中で出てきた事業。中間支援団体の選出も民主的だったと思います。加えて、今までと異なるのは選ばれたのはすべて民間で、そこが支援金を分配するのが今までと違うところ。そういう意味では、これからの計画の中で踏襲しながら入れていく必要があると思っています。

北村：PMFなどの検証はしているのでしょうか。

柏原：予算が潤沢ではなく減っていく中で、事業をどう進めていくのかは内部で検討を行っております。ただ事業を廃止するなどの観点で、振り返ったという状況にはないと認識しています。PMFについては継続のための前向きな提言はあったと思いますが、大ナタを振るうような検証はこれまでできてはいません。

長沼：後ろ向きではなく、長くやってきたものがどう市民に理解されているか、どう溶け込んでいるかの検証が必要だと思います。ずっとやってきたからそのままよいということではないのではないのでしょうか。

柏原：先日の議会で補正予算が成立し、今年度末をめどにPMFの効果検証を進めることとしております。補正なので今年度はPMFのみですが、これをきっかけとして様々な事業に今後、効果検証を広げることがあり得ると思っています。

北村：ステージ1の機会の充実にある項目だが第3期から新しく始まったものではないと思いますがそうした認識で良いのでしょうか。

高橋：そのとおりです。

丸山：計画の見直しの視点の（3）のところについて、国の基本計画第2期が閣議決定されたとありますが、主な課題のところは文化芸術の担い手の活動基盤が弱い、担い手の確保の方策が必要と、「担い手」という言葉が2回出てきています。国としても担い手をキーワードとしているのかなと感じました。また、3つ目には、誰でも文化芸術に触れることができる環境の充実とあります。おそらく、担い手を充実することで、皆が触れる機会を増やすことにつながるというサイクルだと感じます。先ほどから話があった創造活動支援事業、中間支援団体に市から予算配分をして、そこからアーティストを支援する、それで中間支援団体自身も成長していくというのは、担い手という観点で4期でも大事にしていかなければならないことだと思います。これから検証していくということですが、どのような効果があったか、どう良くしていけるかということ、2回・3回の委員会で伺っていきたいと思います。また、SCARTSでも育成をやっているが、1つの施設でできることは限られていますので、より広い担い手の輪をどれだけ広げていけるかがポイントだと思います。

もう1つ。先ほど白鳥さんからあったコロナに関係なく伸びているという点についてです。先日、芸術の森で開催されているチームラボ展に子どもと一緒にってきました。子どもが夢中になって数時間出たがらないほどでした。チームラボはまさにクリエイティブ産業の中に入ってくると思いますが、リアルに見に行ったものが生きてくると思うので、そうしたクリエイティブは札幌市として取り組んでいく意義があると思います。

北村：クリエイティブ産業従事者に限らず、担い手というのがコロナに関係なく、すそ野を広げていくことがこれから大事ということは私も思うところです。

成田：第3期計画の振り返りのところの主要文化芸術施設というのは、おもに芸森やKitaraなどのことでしょうか。

柴垣：ここで言うところの主要文化芸術施設というのは、芸術の森、Kitara、教育文化会館、市民ギャラリー、彫刻美術館、市民交流プラザとなっています。

成田：参考資料1にある天神山などは入っていないのでしょうか？

柴垣：この中には入っていません。

成田：図書館は入っているのでしょうか。

柴垣：入っていません。

成田：なぜ入っていないのでしょうか。

柴垣：文化部所管分ということでいったんの整理をしているかだと思います。

成田：縦割りということでしょうか。文化芸術施設に図書館が入らないというのはすっきりしない感じがしますが。

柴垣：縦割りと言われてしまえばそうした部分もあるかもしれませんが、機会の充実という部分の指標であることから、要素が異なり、文化芸術施設といいながらも、芸術寄りの整理とさせていただいております。例えば文化施設という意味では文化財なども入っていてもおかしくはありませんが、文化財関連施設はまた別にカウントしています。

成田：言葉の定義がわからないと議論ができないので、申し訳ありませんが今後も細かく伺いたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

北村：文化芸術施設は文化部所管のものということ。500m美術館は入らないのかなど、広がりという視点は必要かもしれませんね。

ト部：第3期で検討されたかどうか確認したい点があります。アール・ブリュットという分野があり、国の施策でも障がい者が触れられており、法律もできているところです。そこから、国の助成などもはじまっており、札幌市ではカラフルブレインアートフェスなどが行われています。そういったところで、アール・ブリュットに関するについて第3期計画で検討されたかどうか、福祉・厚労省の分野になる部分もあると思いますが、第3期での取り扱いを答えていただきたい。

白鳥：アール・ブリュットはまちづくりに近いものがあり、実例で街中の展示もあって、札幌でもあってよいと思います。

柴垣：第3期の策定経緯のすべてを把握してはいないのですが、第3期では他分野連携を掲げていて、その中で文化芸術の力を生かしていくということで福祉もそのうちのひとつとして整理されていると認識しています。一方で先ほどご説明した通り、国の計画にも記載がありますので、少なくとも4期計画ではそのあたりを踏まえて検討をしていかなければならないと認識しています。

北村：縦割りの話があったが、連携をしなければならないという話かと思います。芸術と他を異分野と考えるのがそもそもおかしくて、文化芸術の中に教育も福祉の問題も入ってくるので、あまり狭くとらえず、より四方八方に興味をまわしたほうがよいと考えます。創造都市を宣言したときはそういった宣言だったと理解しています。クリエイティブ「産業」というように狭めない方がよいと思います。文化財ではいかがですか、谷本さん。

谷本：文化財でも連携が必要だと思います。個人的な意見ですが、多様性の尊重も非常に重要と考えています。そうした中で、アイヌ民族の歴史文化を、文化芸術の枠でどう考えていくかはかなり重要だと思っています。第3期で行った事業の中で、アイヌ民族についてはステージ3の中の文化遺産・自然遺産の中に入っていて、アシリチェブノミやアイヌ交流センターのプログラムなどの取組が記載されています。もちろん、保存・継承は重要ですが、振興の中に文化芸術がどう連携をとることができるか、しっかり主体的に次の計画に向けて、何ができるか、アイヌの言語や文化



に基づいた文化芸術のクリエイトというのは、もちろん取り組んでいる人がいます。札幌が碁盤の目になる以前の歴史を考える際には、アイヌ民族の歴史がその基礎になっていることが重要ですし、そもそも「さっぽろ」という名前はアイヌ語です。札幌の文化芸術を考えるときに、つい最近アイヌ施策振興法が成立して先住民民族と明示していますが、札幌市の文化芸術振興として、多様性を尊重したアイヌ民族の文化振興を、ぜひ検討していただきたいと個人的に思います。

北村：第3期の振り返りをさせていただいて、ご意見も様々ありましたが、他にいかがでしょうか。

成田：谷本さんの話に重ねてですが、アイヌの文化芸術が、第3期では文化遺産・自然遺産の保存活用だけになっているのが気になります。今でも、変化し続けている・更新しているアートもあるので、それをどうとらえるのか。ここにアイヌの方がいらっしゃるかわからないが、もしいらっしゃらないならなおのこと、アイヌではない我々がどう考えていくのか、当事者であるアイヌ不在で議論を進めてよいのかも含めて深い話をした方がよいのではないのでしょうか。

北村：第3期の振り返りをしながら、いくつかの問題点も出てきたかと思います。創造活動、縦割り、福祉、アイヌ、体験機会などなど。第4期計画の方向性のなかで、白鳥さんからコロナ禍の影響如何という話もありました。3つ目の「重点事項」の中で、異分野連携やアイヌなども議論されていくと思います。それでは、続いて、第4期計画の方向性1～3について進みたいと思います。白鳥さんがおっしゃるようにコロナ禍に見舞われたのでというのは因果関係がないのではないかと、というご意見がありました、いかがでしょうか。

白鳥：文章にするとこうなってしまうのかもしれないが。。

北村：災害、戦争、少子高齢化などなど変動ファクターは多数あるとは思いますが。

白鳥：そういったことを踏まえながら、文言を事務局で検討して示していただければよいと思います。

北村：それでは、この文言修正は事務局にお願いします。

根子：全く別の視点ですが、交流人口の拡大は札幌市にとって大きな課題だと思っています。だから自分がメンバーに入っていると思っています。連携すべき分野に国際・観光も入っているし、単に市民が楽しむだけでなく外から人を呼び込むということは、SIAFもそうですし、PMFもタングルウッド（音楽祭）のようになってほしいと思いますが、そういった視点を第4期に盛り込んでほしいと考えます。先ほどアイヌの話がありましたが、アドベンチャートラベルワールドサミットの中でアメリカにある本部からアイヌや縄文を取り上げてほしいという強い要請もあります。会議テーマとは離れていますが、世界からもそういう要請があります。文化芸術を内向き

でなく、外向きに発信する手段としてアイヌも含めて、今後考えてほしいと思います。

北村：重点的に取り組む項目の整理が重要だと思います。根子さんのおっしゃる交流の問題もそう。この場が札幌市の中なので、道全体などに広げてよいのかわからないが、狭く考えると縮こまってしまうので、風呂敷は大きく広げたほうが良いと思います。道とどう連携するのかなど、いろいろなリンクの仕方があると思います。今日いろいろ話がでてきてまとめきれませんが、第4期の計画をこれから考えるにあたって、皆様の得意分野がおありだと思うので、皆様にも次回まで考えていただき、第4期の方向性についてご意見をいただきたいと思います。

白鳥：次回は第4期の方向性を示すということ？

柴垣：次回は文化芸術の価値、行政としてなぜ公費を投じるのかということ、スタートラインとして共有したいと考えています。その後、計画の大きな枠組みについて協議いただきたいと考えています。重点をどうするかというところはもう少し先の議論と思っていますが、前提として考えていただいた方が良くと思います。

白鳥：次回は皆が意見を考えてきて、ワークショップのように話すということになるのでしょうか。

柴垣：ステージ1～4となっているのは多少いじらなければいけないとっていて、その枠組みを次回の第2回で共有して、それが共有できれば第3回の会議で計画の素案を事務局でご用意して具体の協議に入っていくことをイメージしています。なので、第2回の枠組みを話し合う場面で大切だと思うことも議論していただければ、素案の作りもスムーズになると思います。

北村：最後に次回に向けてですが、重点事項についてはワークショップ的な議論になるかもしれないが、議論することになると思います。あとは文化芸術の価値、公費を投じる理由、そこまでご議論をいただきたいと考えています。

それに先立って、第4期計画の方向性の文言について、添削の要否などをまず考えてほしい。方向性の3つについてはこれでよいでしょうか？

成田：この言葉をそのまま何かに使うのでしょうか？

柴垣：そのまま使うかわかりませんが、次期計画の冒頭説明などで考え方は使うものと想定しています。

北村：では、これから変わることもあるかもしれませんが、いったんはこの方向性で会議を進めていきたいと考えますがよろしいでしょうか。また、第2回は文化芸術の価値を踏まえて、重点的に取り組むべきことについてご意見をいただいきたい。よろしいでしょうか。

成田：そもそも文化芸術という言葉が何を指すかから、話をしてもらえると助かります。

北村：私はなるべく縛りを設けたくない方ですが、広くすると薄くなるというのがあるか  
と思います。平べったく薄くするとなんでもありになってしまうので、その中で何  
が大事なのかを考えていくことが必要だと思います。そして、福祉も教育も観光も  
国際交流も、全てそこに含めて考えればよいと考えます。そういった考えで、次回  
議論をしたいと思います。皆さんには文化芸術の価値をもう一度考え、披露してほ  
しいと考えます。それではこれで本日は以上としたいと思います。